

センスオブワンダーは学びのはじまり

梅田小学校 六年 高橋 暖

書名「センス・オブ・ワンダー」

著者「レイチェル・カーソン」

訳 「上遠恵子」

作者であるレイチェルと一緒に嵐の海、コケやベリーが実る森を冒険しながら僕は、僕にとってのセンスオブワンダーを見つけたくて仕方なかった。レイチェルは世界中の子供達に一生消えないほど確かなセンスオブワンダーを持ち続けて欲しいと語っている。子供の頃は自然の全てに驚き感じ激していても、大人になるとその感覚を失ってしまふからだ。

僕が今でもよく覚えているのは、雨の日の梨狩り遠足だ。長靴の中に入り込んだ雨が、歩く度にグチュグジュと音を鳴らし、面白い具合に足の裏にくつついてくる感覚。顔にぶつかった雨と混ざり合っても甘い梨に、夢中でかぶりついたこと。皆で捕ったコオロギの大合唱を聞きながら眠りに

ついた帰りのバス。毎年梨を食べる度に、この楽しかった思い出が蘇る。もしかしたらこの感覚がセンスオブワンダーなのかもしれないと僕は思った。それと同時に、あの長靴のグチュグジュの音と感触の正体は一体何なのかが気になって仕方なくなつた。調べてみると犯人は、長靴の中の空気と水が混ざり合い、小さな泡がつぶれる時にでる音。水が足と長靴の摩擦を減らし、滑りやすくなっていると同時に、水そのものの抵抗が組み合わさり、なんともいえない奇妙な感触を生み出していることが分かった。調べ終わった時、僕は壮大な研究を成し遂げたような気分になつた。センスオブワンダーを意識すれば、長靴に水が入るという何気ない出来事にも、実はたくさんの不思議がかくれていることを僕は知った。僕の科学の扉を開いたグチュグシュだと思つと、なんだかおかしくなつた。

センスオブワンダーとは、まずは日常の摩訶不思議に驚き、感動すること。何かを知ろうとする

時、たしかに僕は、驚くよりも先にそれについて調べている。そのものと直接向き合っていない。感動する前に知識だけがたまり、もう分かっていると思ったら、それ以上知ろうとしない。でも驚きや感動からはじまる学びは、きつと止まらない。レイチェルの言う「知ることは感じることの半分も重要ではない」という意味が、また僕の中で、カチツとパズルのようにはまった。

僕は昨年葛飾米作り体験教室に参加した。タロベエモチという品種の苗代作りから田植え、稲刈りまで経験することができた。農業に興味を持っていた僕は、様々なワークショップに参加し、今年の大阪万博で農業の未来を考えるサミットに参加する機会をもらえた。僕がこんなに農業に熱中したのは、米作り体験が心を大きく揺さぶったからだ。レイチェルはセンスオブワンダーを持ち続ける為に、子供と一緒にその感動を分かち合ってくれる大人が一人は必要だと述べている。僕が何かを見つけて、みてみてと言った時、母はいつも笑

顔だった。小さな感動を大切に分かち合ってくれた、両親や先生や地域の方々の温かいまなざしが、僕の学びの出発点であることをレイチエルは教えてくれた。（原文ママ）